
なんかカオスな短編集

月食猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんか力オスな短編集

【Nコード】

N3331S

【作者名】

月食猫

【あらすじ】

長編が書けない作者の、ギャグありバトルありホロリあり？な短編を沢山綴っていきたいと思った所から出来ちゃった代物です。笑ってもらえたらとても嬉しいです。

作者の趣味により残酷描写が入るかもしれませんが、多くの人に楽しんでいただけるように極力軽くするつもりです！！

更新は亀以下、自己満足でノリと勢いでやってしまっている上、内容は素人で誰か文才を……！！な作者ですが、楽しんでもらえたら嬉しいです。

チキンがタカに変わる時？（前書き）

チキンな主人公が、何かをきっかけに変わったら？と思いついて書いた物です。主にギャグのつもりです。

チキンがタカに変わる時？

隊長、何か命の危機です。隊長なんていないけど。

どうもこんにちは。傍観者気取りの一般人です。その実質はただのチキンです。ガラスのハートの持ち主なので取扱注意なのです。

それはともかく、現在ちょっとした命の危機に陥っています。アレです。立てこもり事件の人質になってます。まあ、僕以外にも10人近く人質居るんですけどね。

「我々はただ同志達を救いたい。しかしそれが受け入れられなかったため、仕方なく貴様らには人質になってもらう」

とか何とか犯人は何やら屁理屈こねてます。なんか、崇高な志の元に集った仲間を解放しろ的な要求をしています。ついでに完全武装です。爆弾のチラリズムなんて誰も望んでませんし、出来ればこれから先も出会いたくなかったです。

その割には冷静だと思ってるそのあなた。違います。これはただの現実逃避です。僕はチキンなのです。一般人よりも弱いハートの持ち主なのです。あ、何かお腹痛くなってきた。

だってアレですよ？逃げないようにって完全武装したい年こいた大人が銃突き付けて脅すんですよ？要求通らなかつたら皆殺しにするって言ってるんですよ？遅くなっても見せしめで誰か殺されるかもしれないんですよ！？すみません取り乱しました。

ですが、それでも僕は高校生。ここには僕より年下の子だってい

るんです。その子が、親にあやされてるとは言え泣くのを我慢しているのに、年上の僕がとりみだしたらカッコ悪いことこの上ないじゃないですか。幾らチキンでも、そんな醜態は見せたくないっていう意地があるんです。

ちなみに、立てこもり現場になってるのは『amber』っていう喫茶店。マスターが僕のジイちゃん、僕は手伝いをしてたんだ。……じいちゃんの夢の城が踏み荒らされてるかと思うと、正直はらわたが煮えくりかえる想いだけど、チキンで弱虫な僕は何もできないと言っより、情けないことに怖くて体が動かないんだ。

じいちゃんは丁度買い出しに行ってるじゃない。僕が店番してる最中に来たんだ。運がない。でも、僕はじいちゃんっ子だから少し安心してる。……けどやっぱり怖いモノは怖いんですけどね！！

外では警察と野次馬がわんさか。警察はともかく野次馬の方々は全力でこの場から消え去って欲しい。そんなに人の不幸が楽しいですか？これは見世物じゃないんですよ？飛んできたマスコミの間が、ニヤニヤと笑っているだろう野次馬の人達が、酷く醜い存在のようだ。なんて、結構ギリギリな僕が思い始めた頃、一番年下の子がとうとう泣き出してしまいました。

その子をきつかけに、爆発した。理不尽だと叫ぶ高校生達に、子供だけは助けてほしいと頼む親子と、神様仏様に助けを祈るご老人。一気に騒がしくなった店内は、一発の銃声であっけなく静まり返りました。

「騒がしい！！貴様等は人質である。貴様たちが生きているのは一重に我々の寛大なる心のお陰だと心得るが良い！！次は騒がしくした奴から撃つ」

理不尽です！！横暴です！！なんて心の声が飛び交った気がしましたが、誰ひとり口にはしませんでした。なにせ、相手はなかなか思い通りに行かなくてイラついているマトモじゃ無い人達。そして、誰も進んで死にたいとは思いませんから。

「バカかアンタ等。今言った事っつーか全体的に理不尽すぎて笑えるぞ」

誰ですかこんなギリギリな状況でそんな事言ったのは！！驚きですよ！？うつかり心臓止まりかけましたよ！？ついでに僕の隣にいた常連の幸田さん（70歳男性）が倒れちゃったんですけど！！なんか心臓が止まったような『ピー』って音が聞こえた気がしたんですけど！？

倒れちゃった幸田さんを介抱しながら、うつかり突っ込んでしまった僕。でも、そんな僕達を無視して、声の主と犯人さん達の会話が始まっています。

「貴様、我々を愚弄するのか！！」

「実際にんだよバカが。だいたいよお、こんなちっせえガキにんな物騒なもん付きつけてる時点でお前等の人間性が終わってる事に気付いてんだこのタコ」

「なにい！！」

「年下のガキやら余生を楽しく過ごしてるご老人、幸せに暮らしてる家族。これ全部犠牲にしてまで救う価値があるのかよ。てか逮捕されたんだろ？いったい何やったのさ」

「我々は崇高なる志のため、悪に対し天誅を下しているのだ」

堂々と胸を張って答えた。Cさんを

「イコール人殺しじゃねーかバカヤロー」

とバツサリ切り捨てました。アレです。時代劇とかで『切り捨て御免』と言わんばかりの勢いでした。ちよつとどころじゃ無く胸がスカッとなりました。

「貴様あ！！それ以上バカにする事は許さんぞ！！」

「おつと、そいつで俺を撃つのか？俺は構わねえけど、俺を撃つた瞬間…いいや、これ以上何かを傷つけた時が、お前の負けだ」

ビククリするくらいの豪胆さで言つてのけたのは、良くカウンタ―席の端っこの方で眠そうにしてる不良っぽい人だった。でも、顔に似合わずとても優しい人だつて知ってます。だけど、こんなに頼もしい人だとは思いませんでした。

いつも眠そうな所しか知らないの、なんて言うんでしょう。…覚醒状態の吾妻君を見るのは初めてです。でも、いつものチキンな僕だったらガクブル状態になってただろうけど、僕も何か極限状態？になつてるからそこら辺は大丈夫でした。

むしろ若干暴走した様です。吾妻君が着火してくれました。僕の何かに。

「そろそろお帰りいただけますか？ここは貴方方の様な薄っぺらい人間が土足で踏みにじって言い様な場所じゃないんですから」

うつかり滑り出てきた言葉は、思いの外冷たく響いた。

「大体、ここがどういうところかご存知ですか？ああ、それも理解できないからこんな愚かなまねができるんですよそれはすみませんでした。いやあ、まさかいいい年こいた大人がこんな小さな子供にすら武器を向けるなんて素晴らしい脳みそをしていますねえ。しかも店内で発砲？いっそゴキブリの脳みそと交換した方が良いんじゃないですか？」

なんか、ふつきれちゃいました。今、自分でもかつてないほど良い笑顔浮かべて気がします。ただ、それを見た皆さんが顔を青くしているのには驚いてますけど。

しばらくお待ちください

大人しく警察に自首してつた、自称『世界の夜明け』（痛々しい事この上ないよね）のメンバー達。もちろん、吾妻君とタッグを組んで追い込みました精神的に。肉体的にやったら色々とめんどくさいと言う、今まで培ってきたチキンの僕がいましたから。

その後、その様子を見てた幸田さん（途中から復活してました）が「ヤクザと紳士の連係プレーが素晴らしかったです。絶対に敵に回したくありませんが。ええ、絶対にです」

また高校生A曰く

「あれのどこがチキン！？思いつきり毒舌大魔王じゃん！！サディスティック星の紳士じゃねーのあれ！！」

と言っていた事は余談。僕の知らない事です。

僕はこの事件をきっかけに、少し大きくなれた気がします。ええ、全ての基本は笑顔です。

チキンがタカに変わる時？（後書き）

後半グダグダになってしまいました…。最後まで読んで下さりありがとうございます！！

11月6日、加筆修正しました。

ある日の兄弟の会話文。（前書き）

とある兄弟の会話文的な何か。議題は『ヒーローのヒーローは居るのか』

ある日の兄弟の会話文。

ある夜の事。仲の良い兄弟の弟の方が、とある疑問を兄に聞く事にしました。

「兄ちゃん」

「何だ？愚弟よ」

答えた兄は、やはり変人だった。しかしながら、これが兄の通常使用なのである。

「愚弟ゆーな愚兄が。…それはともかく、今ふと思ったんだけどさ」

「なんだ？」

「ヒーローとか勇者って人を守ったり助けたりするじゃん？」

「それが勇者だのヒーローだのと呼ばれる所以だからな」

「じゃあさ、勇者やヒーローは誰が護ってくれるの？」

「普通は仲間や友人、もしくは恩師とか恩人とかって答えるんだろうな」

ここで『普通は』と出る所が実に兄らしい。なにせ、兄は俗に言う変人に分類されるからだ。

「じゃあ兄ちゃんはどう思ったのさ」

「いないんじゃないの？」

「んなアツサリ風味に言われても……」

弟のツツコミに反応したのかは定かではないが、兄は手にしていた本を置いて弟と向かい合った。

「だってよ、力があるから勇者とかヒーロー……つまりは主人公ポジションにいる訳だろ」

「そうだね」

「そして、大抵そう言う奴等の周りには、主人公たちより強いヤツは少ない。いたとしても、すぐに追い越される。力のピラミッドの頂点に君臨するものをどうやって護れってんだ？」

「それは……ない、かな？」

「その通り。それに程度の差はあれど、主人公たちはいろんな意味で強い。精神的に弱ったり、怪我をして肉体的に弱ったりしても、仲間達がフォローする。でも、仲間達にとって出来るのはフォローだけで、ヒーローのヒーローにはなれない」

「つまりはあれですか？ 仲間達はオマケ的な何かなんですか？」

「端的に言えばそうかもしれないな、我が弟よ」

ある意味ザツクリ言ってくれた兄に、弟は苦笑を浮かべながら見当違いな所にツツコミを入れた。

「何キャラですかオニーサン」

「オニーサンはオニーサンですよー」

「……どうでも良いから話を続けて下さいな」

「了解。…お飾りの主人公モドキは本物さんに陰ながら守られてるパターンが多い。恩師や恩人は一時的な救済もしくは心身ともに多大なる影響を与え、主人公の芯を創る。でも、その場合ある意味神と同列扱いになると思っから、いつでも駆けつけてはくれない。俺の独断と偏見では、ヒーローと波は常に人のピンチに駆け付けてくれる存在だからな」

段々楽しくなってきたのか、饒舌になっていく兄。そして話は終わりへと近付く。

「つまりは例外はあるかもしれないけど、基本的には主人公を護る人はいないってことだよな」

「長い話の割にはなー。でもギリ相棒は背中を預ける的な意味で仲間より上かも」

「そっかー」

「でも結局のところ、そんな人間は稀だし、心配する事はないよ」

「そう?」

「普通は自分の事で手一杯なのに、わざわざ他人まで守ってんだか

ら自分一人位楽勝だろー。

しかもあれだぞ？現実世界じゃそんな奴なんてもうとつくに絶滅
危惧種認定もしくは皆無だろうし」

「でもよく自分の身を顧みずっていうパターンがあるんだけど」

「そりゃあれだ。そこで死ぬようなら主人公じゃねーだろーし、そ
う言うバカの周りには大抵ストッパーとか鬼の説教があるんじゃない
じゃねーの？」

「ふーん」

「それに、二次元の世界とまではいかないけど、世の中意外とどう
にかなるもんさ」

「だといーねー」

「だよなー。まあ、どうでも良いか」

「まあね。僕等は間違っても主人公にはなりえないし」

「そーそー。俺は自分を構成する物質達しか護れませんからー」

「むしろ兄ちゃんは勇者じゃなくて魔王サイドだろー」

「ふははははは」

「やめて無表情棒読みのそれは若干怖い」

こうして、兄弟の時間は更けていくのであった。

ある日の兄弟の会話文。（後書き）

何が書きたかったんだろう自分。でもこれ半分以上実話だったり。
二話目がこれとかでホントごめんなさい。スライディング土下座
仕様です。でも楽しかったです。

ある夫婦の話（前書き）

最近ギャグしかやってなかったの、シリアスでネタ出しします。
更新が相変わらずカタツムリ以下です。楽しいかどうかはわからない
自己満足でもよければ読んでください。やっぱ文才欲しいです。

ある夫婦の話

side：小説家の妻

騒がしくなった病院のベッドの上で、私は君と今までであったことを振り返っていた。

私たちが初めて会ったとき、私は男勝りなじゃじゃ馬で、君は本が好きな大人しい人で。普通だったら、接点なんてかけらもないような二人だったね。

あの頃の私は、とにかく強く在りたくて。だから、女の子らしいこととか室内系のものは嫌いだったし、本なんか大嫌いだと言って、男なのに本ばかり読んでる君に絡んできた。あんなの、ただの八つ当たりなのに、その時は私のほうが正しいんだって思い込んでた。

ある時、私が本が嫌いだっていったあと、その時君が読んでた本を読みもしないのに馬鹿にしたことがあったよね。でも、その時初めて君がまっすぐ私を見つめ返してくれたのを覚えてる。だって、恥ずかしながらそれが恋に落ちた瞬間になったから。

それまでは結構曖昧な笑ではぐらかされて相手にもされていなかった。でも、その時君は、それは違うと言って見つめ返してきたその瞳があまりにも真っ直ぐで。そして気づいた。私がこんなにも彼に絡んでたのは、無意識のうちに気になってたから。本が嫌いだっていったのは、君が本ばかり見てるから。それが悔しかったんだって。その時初めて気づかされた。

そんな私の複雑な感情を知ってか知らずか（多分分かってなかったんじゃないかな）、それ以来私にいろんな物語を教えてくれるようになった。勉強とか、あまり得意ではなかった私でも読みやすいような簡単なものから、だんだんグレードアップしていった。それ

でも本が嫌いだと言っていた私がそれらを読めたのは、きっと君のおかげだと思う。

君が勧めてくれた本を読んで、どこがどんな風雨に面白かったか伝えたときの君の顔が、本当に嬉しそうに笑ってて。感想を言い合いながら笑いあえたあの時間がひどく優しくて。気がついたときには立派な活字中毒者になっていた。

そんな私たちは、周りには良く男女逆転夫婦のようだからかわれたりしたけど、それでバランスが取れていたんだからいいじゃない。

君が私にたくさんの物語を教えてくれて、私はそのお返しに君を太陽の下に引っ張り出した。二人して相手の笑顔を望んだ。

卒業したあとも、なんやかんやと関係は続き（でも、実は告白もしてなかった）、気がついたら結婚してないのに同棲までしてた。良くそれで結婚してないなと驚かれてたっけ。

プロポーズは君からだった。まあ、本当は私の方からしようと思っ
てて、夕飯の時にポロリと

「あたしから君にプロポーズしようと思うんだけど、指輪のサイズ
っていくつ？」

っていったら、ご飯吹き出すくらい驚いてたね。色々と大惨事だったのに、君が必死になって

「それは男としてちよつとどころじゃなく譲れないものがっ／＼」
って必死になつて説得しようとしてたから、思わず声を上げて笑っ
ちやった。

次の日に、真っ赤なバラの花束を抱えて（半ば埋もれて見えた。後から聞いたら108本もあったらしい）プロポーズしてくれた君は、バラと同じくらい真っ赤で。とても可愛かったけど、それと同じくらいこよかった。

物語を愛した君は、それと同じくらい物語に愛されていたね。君

は自分の趣味だからって私以外にはあまり見せようとしなかったけど、欲目抜きに全て輝いて見えた。君が書いた物語は、それらすべてがいつも私の自慢で。実はこっそり家族や友達に見せてたの。ゴメンネ。でも好評だったよ。君が綴る物語の数々の綺麗なことといったら！！正直、これが世の中で評価されなくて結構本気で悔しかった。

だからね、君が本当には小説家になりたかったって聞いたとき、私キレた。だって、君がその夢を諦める理由の中に私がいたんだもの。

「いざとなったら紫蘭君養うくらい簡単なんだから！！私が腹括ったんだから紫蘭君も覚悟決めて小説家になりなさい！！」

って、盛大に吠えちゃったわ。それで、君もやる気になったみたいで、これでダメだったらって出したら、それが予想以上に売れて驚いてたっけ。あつという間に人気作家に仲間入り出来たんだし、やっぱり才能あったんだよ。

私だけの物語じゃなくなったのは少し残念な気もしなくはないけど、それ以上に君の物語がたくさんの人に夢を与えてくれることが嬉しいの。…うれしかったの。

でも、でもね。これは神様が君に与えた罰なんかじゃないよ。君は無力なんかじゃなかった。頼りなくなってた。だから、どうか自分を責めないで。これはね、私の自業自得なの。

買い物をした帰りに、ふらりと寄り道してたら交通事故に遭った。しかも、どうやら打ちどころが悪かったらしい。入院をして、表面上の怪我が治ってきているのにもかかわらず、私は衰弱していくばかりで。きつと、来年の桜を見るどころか、これじゃあ雪を見ることすら怪しいかもしれない。

ほんと、物語のように思い通りにはならないものね。昔は君をい

じめる連中を蹴り飛ばして、つい最近まで職場を駆け回ったこの足が、今じゃもう感覚すらない。君の涙を拭きたいのに、手がまるで鉛で出来てるみたいに重くて、なかなか君に届かない。

それにしても、ホント、ついてないわ。

小説家だから、仕事関係で死に目に逢えないなんてことにはならずに済んだって君は笑ってたのに、偶々着替えとかを取りに家に戻った先で渋滞に巻き込まれて、後最低5時間は戻ってこれそうにないらしいけど、ゴメンね。ちよつとそれまで持ちそうにないっぽい自分の体のタイムリミットは自分がよくわかるし、今お医者さんたちが動くのを諦めだしたんだもの。

side end

side：弟

袖をつかまれた。そして、伝言を頼まれた。：頼まれなくなかった。俺に伝言を頼んだその人は、俺の姉ちゃんだったけど、酸素マスクをつけて点滴を受けてて。素人の俺でもわかるくらい、姉ちゃんは死期が近づいてるように見えた。

「本当は、こんなこと竜ちゃんに頼んじゃいけないとは思ってるけど、お願い。これから言うことを、紫蘭君に伝えて欲しいの」

「ねえ、私は死んでも紫蘭君を愛してる。だから、忘れられるのはちよつとイヤ。でも、私が死んだあとに紫蘭君に好きな子がきたら、私を理由にしてその恋を諦めるようなことをしないで欲しいの。紫蘭君が、私が愛したあの人が幸せだと笑顔になれる事が私の幸せだから。」

どうか、幸せに。それが、私の最後の願いです」

自分の口から言えよ。なんで俺がつて口から出そうだったけど、

喉に引っかかって出てこなかった。口を開いたら、きつと出てくるのは言葉じゃなくて嗚咽になると思ったから。

それこそ、生まれた時からの付き合いで。年は離れてたけど、結構姉弟仲も良い方で。だから姉ちゃんの内側も外面も結構知ってるつもりだった。勿論、姉ちゃんも俺が生まれた時から俺のことを知ってる。だから、俺の心の中もお見通しだと言わんばかりに苦笑された。

まるで、さすがのように俺の袖を引っ張ったその手は微かに震えて。もうすぐ死ぬかもしれないってのに、その目は怖いくらいに真剣で。これから死んでしまうはずのこの人が、これほどまでに真剣な『アイ』をもって揺るがないでいられたこの人を、不謹慎にも心底羨ましいと思ってしまったから。

泣きそうなのを堪えている俺を慰めるかのように、ゆっくり撫でてくれたその手は相変わらず優しいのに、その細くなってしまった指が、冷たい手が、余計に俺の涙腺を刺激した。

そして、その直後だった。姉ちゃんの手が滑り落ちたと思ったら、機械が異常を知らせてた。俺は慌ててナースコールを押したけど、なんとなくわかってしまっていた。

姉ちゃんはもう、助からないのだと。

side end

side：小説家の妻

伝言を頼んだ。遺書は正式なのとそうでないのを書いた。君が一人になれないように、できる限り手を回した。

やだなー、死にたくないなー。というか、こんな時まで君のことばかりってどんだけよ私。…まあ、愛してるからなんだろうけど。

自分のことや家族のことより、君のことが気になって仕方ない。大人しいくせに、たまにとんでもない無茶をする君のことだから、無理して怪我しなきゃいいんだけど。

ああ、やたらとまぶたが重いし体は指ひとつ動かせない位重いの、どこか軽い気がする。ついでに、すごく眠い。竜ちゃんとか、お医者さんとかが呼ぶ声が聞こえる。竜ちゃんは泣いてるみたい。せめて、最後の息に乗せた言葉が、届けばいいな。なんて、望みすぎかな？

「すき」

ピーーーー。

最後に何か、聞こえた気がした。

side end

それはきつと、奇跡でした。

side：小説家

竜君から華凛が危ないと連絡が来た直後、ちょっと無茶をして、全速力で走って。5時間はかかるだろうと言われたけど、2時間半位に縮めた。だけど、間に合わなかった。

いつも笑顔で僕を迎えてくれた君の顔に白い布がかかって。でも、その意味を理解しなくて。走ってきたから汗びっしょりで体中湯気が出そうなくらい暑いのに、指先はひどく冷えてた。だけ

ど、触れた君の手の方がもつとずっと冷たくて。僕の体温を移そうにも、まるで拒絶するかのようなその温度が、まるで僕を侵食していくかのように目の前の現実を突きつけてきた。

あまりにも悲しすぎて、僕の心が裂けてしまいそうだった。

きつと、どこかで信じてた。キミが死ぬはずがないって。でも、キミは死んで、僕は間に合わなかった。いつそのこと、キミのこの冷たさで凍死したいと思った。

不思議と涙がでてこなかった。涙が頭が心が凍りついてしまったのかもしれない。そんなことをぼんやり考えながら、僕はただただ華凛の手を握ったまま立ち尽くしていた。

どれほどそうした居たのだろうか。気がつくと、君の担当医と竜君がいることに気がついた。担当医からは、淡々とキミの最後を伝えられた。泣きはらして真っ赤な目をした竜君からも。

「最後まで、強い方でした」

「伝言を、頼まれた」

「アンタを愛し続けるって」「アンタという幸せだったって」「忘れられるのはイヤだって」

「幸せに、幸せになって欲しいって」

「姉ちゃんは、最後の最後までアンタの幸せを願って、アンタを愛してた」

あまりにも哀しすぎて、気がついたら熱い何かが頬を濡らしていた。気がついてしまったあとは、なし崩しにボロボロボロボロ涙が溢れた。歯を食いしばっても、嗚咽が漏れ出した。

担当医と竜君が気を利かせて君と二人きりにしてくれたようだったけど、それに気づく余裕なんてなくて。

僕はただただ、溢れる十二カに身を任せて、叫んで泣いた。

気が付くと、竜君と一緒に家に帰っていた。君もようやく帰ってこれた。けれど、ただいまを言う人は居なかった。お帰りを言ってくれる人もいなかった。

もともと、竜君が生まれてしばらくしてお義母さんは亡くなって、お義父さんもキミが卒業する直前に死んだ。僕の両親とは別居しているため、いつもおかえりと僕らを迎えてくれるのは、華凜、君だった。

竜君も、僕も、何も言わずに仏間にいる君のところに座り込んでいた。ポツリポツリと君の思い出を語らいつつも、言葉と同じくらい涙も溢れた。

そんな時、チャイムが鳴った。華凜の死を聞きつけてやってきた友達だと思ったため、僕が玄関に向かった。予想通り、高校時代からの友人の斎川夫婦だった。なぜか、ラブラドルレトリバーの子犬と、キャリーバック、それから犬用猫用のペット用品とエサを持って来ていた。

「華凜ちゃんから、最後のプレゼント、預かってきた」

「犬の方はカラン、ラブラドルレトリバーで四ヶ月半くらいでトイレのしつけも済ませてある。こっちは猫のローダ。見てのとおり虎猫で以下略。ちゃんと渡したからな」

彼らはそれだけ言ってさっさと仏間に行ってしまった。玄関には大量のペット用品とカランと紹介された子犬だけ。どうやら猫の方

は竜君らしい。

訳が分からず呆然としていた僕は、下から聞こえる切なげな声を聞いて少し我を取り戻した。最出した僕の手を、カランは遠慮がちに匂いを嗅いだあと、甘えるようにペロリと舐めた。そして、怯えさせないようにゆっくりとなでると、気持ちよさそうに目を細めて体を押し付けてきた。

カランの体は、暖かった。生きている温かさが、いつの間にか冷えていた僕の体をじわりと温めてくれて。僕はカランを抱きしめたまま、また少し泣いた。カランはしつぽを振りながら、静かに僕の涙をぺろりと舐めた。

しばらくして、カランの首輪に小さな手紙を見つけた。それは、君からだった。

『紫蘭君と竜ちゃんへ

私はもう体が動きそうにないので、カランに紫蘭君を太陽の下に引っ張り出す役割をバトンタッチします。竜ちゃんはローダくんに振り回されてもらいます。私はきつともう二人の涙を拭いに行けないから、この子達に拭ってもらってね。

私たちには子供ができなかったけど、この子達を子供だと思って大切にしてあげてください。

この子達も、紫蘭君や竜ちゃんより先に天国に行くけど、すぐじやないから。皆で笑ってハッピーエンドになるような土産話沢山持つて、よぼよぼのお祖父さんになるまでこっち来ちゃダメだよ。

ちゃんと待つてるから、急がずゆっくり、幸せを感じて生きてください。

華凜より』

いつの間にか斎川夫婦は帰っていた。僕がカランを連れて仏間に

行くと、僕と同じように泣きはらしつつもしつかりと子猫を抱える竜君がいた。ローダ君は大人しく竜君に抱きしめられたまま、小さく鳴いて挨拶をしてくれた。なでるとやっぱり暖かくてふわふわしてた。

ねえ、華凜。この子達を僕らの新しい家族にするって決めたのはいつだったの？聞きたいけど、もう君の声は僕に答えてくれない。それがまた、堪らなく悲しかった。

もし、叶うなら。君と、竜君と、僕の三人でこの子達の名前を決めたかった。

side end

『私はね、いつも紫蘭君に恋してる。自分の意思を伝える時のあのまっすぐな瞳に宿った光とか、照れたようにはにかむ顔とかペンだことか色々ある私より大きな手のひらとか、しょっちゅう寝癖まみれになってるサラサラの髪の毛とか、もうとにかくたくさん！！ふとした瞬間に、ああ、私紫蘭君のこと好きだなー、って思うんだ。

なにげない動作のはずなのに、なぜか紫蘭君にだけキュンキュンと心の危険信号が鳴るの。これ以上は心臓に多大な負担が掛かります！！てね。だって、心がキューってなって顔が真っ赤になって心臓がバクバクして頭がパンクしてとろけそう。物語の中の恋する少女達の気持ちがよくわかった気がするわ。

あと、背中とか。特に、物語と向き合ってる時の背中が好き。その背中に寄りかかってまどろむのが好き。君のキーボードを叩く音を聞いてると、不思議と幸せな気分になってくるの。なんでか分からないけど、君の背中は無条件に私を許してくれるような気がするの。ご飯を作ってる最中にちらりと見える背中が、まるで旅立っているみたいに見えたりもするけど、ちゃんと帰ってきてくれるって

知ってるから、その背中を見送るのも嫌いじゃない。

でも一番好きなのは腕の中。ぎゅってされると包み込まれた感じがして、とても安心できるの。心臓バクバク言ってるけどね。二人でギュッてし合ってるのも、竜ちゃんを挟んでやるのも好き。

多分これを紫蘭君が読んでるって事は、私はもう死んでるんだと思う。つまり、私が送られる側になってしまったって訳だね。

でもね、私は生き続けるよ。みんなの心や記憶の中とか、紫蘭君の書く物語の中に。みんなの中に、きっと私のかけらはあると思うから。

最後に、送られる私から残される君へ

貴方は私の最愛です。きつと、これから先もずっと。そして、君のこれからの人生に精一杯の祝福を』

by 『小

説家の妻』の最後のラブレターより

ある作家が新作を出した。『カナシ』と名付けられたその物語は、作家とその妻の実録に、ほんの少し手を加えただけだという。

その作家は、一年前に最愛の妻を亡くしていた。初版の発売日がその妻の誕生日だったということもあり、手に取るものは多かった。なかには、からかいや冷やかしの気持ちをもっていたものも少なくないだろう。

その物語は、クチコミや書店員の手描きのポップなどにより、爆発的に広がっていった。

二人を分かť悲劇が悲しかった。相手を想い合う気持ちが哀しかった。二人や周りの人の愛が愛しかった。悲し、哀し、愛し。読ん

だ人は口々にそう言った。

ある日のこと。彼は、『一番泣けた本』の作者としてインタビューされることになった。

「僕は、間にあいませんでした。だから、間に合わせてあげたかったです。せめて、最後に彼女の名前を届けたかった。最後に愛を伝えたかったから」

「奥様のこと、とても深く愛してらしたのですね」

「ちよつと違います」

「?違う、とは?」

「彼女は今でも僕の最愛のままです。今でもまだ、愛しているんです」

そう言った彼は、擦り寄ってきた家族の頭を優しく撫でていた。

ある夫婦の話（後書き）

思いつきによる適当クオリティ。丁寧さはログアウト。とりあえず死ネタで泣ける話を書きたかったけど残念仕様。でも書きたかった自己満足。ここまで読んでくださりありがとうございます。

シリアスもどき（ただしハピエン）（前書き）

前回に引き続き自己満足低クオリティ。いまいちシリアスになりきれない感じを目指してみた。そして何か吹っ切れてきたかもしれない今日このごろ。

駄文で良ければどうぞ。

シリアスもどき（ただしハピエン）

突然突き飛ばされたのと、ついさっきまで俺がいた所から嫌な音がしたのは、ほぼ同時だったと思う。背中に何か温かなモノを感じて、何故かとても振り返りたくなかったけど、振り向かなきゃいけないような気がした。

そして、見えたのは。さっきまで一緒にいた悠の、血塗れの姿。ヤツは俺を見て笑った。

「無事……で……よ……かつ……た」

凄くうれしそうに笑って、俺の方に手を伸ばした。慌ててとつたヤツの手は、段々と冷たくなっていく気がして。救急車を呼ぶ声や、悲鳴がそこらじゅうからしてるハズなのに、何も聞こえなかった。世界の音が消えたみたいに感じた。その中で、だんだん悠の息が小さくなってくのと、自分の心臓の音がやけにはつきり聞こえていた。道路に広がる赫と比例するように、どんどん悠が冷たくなってく気がして、手をずっと握ってた。どっかいかないように悠の名前を呼び続けた。握った手から力が抜けてだらりとした時、芯まで冷えて、何か罅が入ったような音がした気がした。

そして、俺は悠の手を握ったまま救急車に乗って。必死で呼びかけて。気がついたら手術室の前で悠の両親と俺の親父と一緒にになって座ってた。全ての時間が曖昧だった。まるで一瞬の出来事のような気がした。でも、結構ゆっくりだった様な気もする。

世界の全てが、まるで壁一枚隔てたかのように曖昧だった。悠の両親が泣いているのも、親父が休めと言っているのも。俺が未だに血塗れだったことも。全てどうでもよくて。ただ、壁一枚向こうにいる悠の事だけが、俺をつなぎとめていた。

「一命は取り留めました。しかし、いつ目が覚めるかは彼の生命力次第です」

その言葉が、俺の頭を覚醒させた。悠が助かって嬉しいと思う心と、生命力次第って投げやりだろお前っていう怒りの感情。ともかくごちゃごちゃしてたけど、手術室から出てきた悠は、あの時よりの少し顔色が良くなっているような気がした。それだけでも、酷く安心した。その後の事は覚えてない。親父曰く、確認して気が抜けたと言わんばかりにぶっ倒れたらしい。

あれから一カ月。毎日時間の許す限り、俺は悠に会いに来ているけど未だに悠は目覚めない。毎日、学校であつた些細な話をする。楽しい話。けど、いつもそれを聞いて腹を抱えて笑ってくれるお前が反応しないなら、楽しさマイナスだぞこのヤロー。

悠を轢いたのは、トラック。原因は携帯していた事に寄るよそ見。悠が思いっきり俺を突き飛ばしたのか、悠が吹っ飛んできた位置と大して変わらない所にいた。トラックの運転手は逃げようとしたけど、何人かの善良な人に寄って止められた。ちなみに俺は思いつきで殴った。でも悠のお母さんが凄かった。平手で人が吹っ飛ぶのを初めて見た。

毎日、お前の目が覚める事を祈って。でも、実際は会えないお前に絶望して。今日もきつと目覚めてないだろうなーと思ってた。どこの眠り姫だお前は。王子のチューで目が覚めるんですかでもお前男だから姫さんのチューか。まあいい。早く目覚まさないとまたアホなことやらかしちゃうかもよ？俺。

「…えと、おはよう？」

前言撤回。チューは必要なかった。悠は目覚めた。

「今は夕方だからこんちにわだろ。…寝すぎだぞアホ」

「あはは、ゴメンね？うつかり体が動いちゃった」

「危なくなったら俺を盾にするとか言ってたくせに、何言ってたんだよ」

「うん。ゴメンね」

どうか、気付かないでほしい。さつきから俯いて動けなくなっている俺の声が震えている事に。俺の目から水が出ている事に。こんな俺情けなくて見せられねえ。ああ、もうグチャグチャだ。でも、これだけはわかる。自信をもって言える。

「また会えて良かった……！！」

縋りつく様に抱きついた。これでヤツに俺の顔は分かるまいフハハハハ。前より少しやせた体は包帯やギプスでいっぱい。でも、今俺の腕の中にいる悠はちゃんと暖かくて、心臓も力強く脈を打っていた。酷く、安心した。この温もりが消えなかった事に。

チクシヨウ頭をなでんじゃねえよガキじゃねえんだぞってか断じて俺は泣いてない目から垂れ流してるのはただの塩水だ心配させんじゃねえよお前どんな眠り姫気取りだよ。

そう言いたいのに、出てくるのは嗚咽としゃっくりばかりで。しばらく俺は顔を上げられそうにありません。いつだってこいつは俺の上に行くから嫌いだ。確かにお前には毎日会ってた。でも、『お前自身』には会えなかった。凄く、凄く会いたかったんだぞこのヤロウ。

抱きついてるから、悠が俺の顔を見る事が出来ない。同時に、俺も悠の顔が見れない。それは残念だ。こいつの笑顔が見たかったんだからな。けどもうちょっと待ってて。

「帰ってくるのが遅すぎんだよバカ……。1カ月……待たせすぎだ」

「はは、ちゃんと待ってくれてたんだろ？」

「俺は某忠犬じゃねえんだぞ」

「僕はちゃんと帰ってくるよ。君が待っててくれる限りは」

「はは、すつげえ告られた気分。女の子にも告られてないのにー」
軽口をたたきながら、やっとお互いの顔をまともに見た。いつも
さりげない毒舌を吐く悠も、俺と同じ位泣いてた。けど、結構レア
な、こっちの胸まであったかくなる笑顔を浮かべてる。そう。これ
が見たかった。ようやく見れた。

「君、顔中汁だらけだよ？僕の服についたらどうしてくれるのさ」
文句を言いながらも肩を貸してくれるから、遠慮なく汁まみれに
する。昔は俺がやられてたんだから思い知るが良いフハハハハ。こ
の汁の原因はお前です。悠のあったかさが、俺の中の凍りついてた
何かを融かしてるから。現在解凍中。ようやく俺も笑えるよ。

俺はきつと、握っていた悠の手から力がぬけてだらりとしたあの
瞬間を、失うかもしれないという恐怖に押しつぶされたあの瞬間の
冷たさを忘れることはできないと思う。でも、それと同じかそれ以
上に、悠と『逢えた』あの時のぬくもりを、再び笑い会える日が来
た幸せを忘れることもないと思う。

これから、悠はりハビリとか色々あるし、それ以外にも沢山辛い
こともあると思う。けど、俺はこの二つと悠がいれば、意外となん
とかなるような気がした。

「ところでさ」

「なんだよ」

「言い忘れてたんだけど」

「何を」

「その、ただいまを」

「おかえり、悠。一体この一ヶ月どこまで行つてたんだよお前は」

「三途の川っぽいところでひいじーちゃんひいばーちゃんその他諸
々とエンカウント&バトル」

「ほんと何してきたのお前えー!!」

シリアスもどき（ただしハピエン）（後書き）

ハッピーエンド主義者。だから最後にギャグ投入して空気を壊してみた。そしていつもの残念クオリティ。にもかかわらずここまで読んでくれた人ほんとにありがとうございました。

とりあえず正座な（前書き）

何か吹っ切れたようです。駄文でよろしければどうぞ。

とりあえず正座な

その日、彼等はいつものように楽しんでた。ある者は怪しげな実験薬を作り、ある者は筋トレという名の破壊活動に勤しみ、ある者は「締め切りのドアホ　！！！」と叫びながら執筆活動に勤しんでいた。その他にもいかにもフリーダムといった様子である。しかし、ここは勉強に励む場所、学校である。さらに言えば、本来なら授業中のはずの時間帯である。しかし、先生は誰もこの教室に足を踏み入れようとしない。以前、些細な事で彼らから総攻撃をくらい病院送りになった教師が何人もいたからだ。

「魔王クラス」と悪名高いこのクラスの唯一の良心であり、一番の苦労人である如月紅牙は、そろそろ自分の限界が近づいていることに気付いていた。彼はいつも、自分の気付いた範囲でクラスメイト達の暴走を止め、被害にあった人達に頭を下げたり騒ぎの後始末をしたりと走り回る日々。

クラスメイトが怖くて何も言えない教師や他の生徒達は、常に紅牙に文句を言ったり注意をするように言ってくる。そしてクラスメイト達も紅牙に止められるたびに不平不満を漏らす。実はこっそり保健室と胃薬のお世話になりつつある。むしろ胃薬が親友状態だ。

戦意喪失して怯えてるくせに、自分より弱いと思っている相手には自分を優位に見せようとする醜い大人。怖い危険だといいつつも野次馬根性丸出しにした揚句、結局巻き込まれて文句を言う生徒達。そして自分のやりたいこと優先で周りに及ぼす被害について無頓着なクラスメイト達。

そろそろ俺はキレても良いんじゃないか。むしろなんで俺は今までキレなかったんだ。

ふと浮かんだその考えは、消し去るにはあまりにも大きな問題だった。第一、問題児を総動員したクラスに何故、ごく普通の学生やつてた俺が入ってるんだろうか。何故自分があのアホどもの尻拭いに貴重な青春を消費しているんだろうか。紅牙がそう悩んでいる最中も、その思考をまとめさせたくないと言わんばかりに、いつものようにフリーダムに振る舞うクラスメイト達。

「あ、ヤベ…間違えた」

怪しすぎる謎の物体を作り出す奴。しかも絶対アウトライン超えてる。

「まったく、校舎弱すぎだぞ」

自分のミスで校舎を破壊しているのにもかかわらず、校舎のせいにするアホ。

「真剣持って来たからチャンバラしよーぜー」

「……おおー……」

その時、紅牙の近くにいた比較のおとなしいクラスメイトは、確かに何か勢い良くちぎれる音を耳にしたと言う。そして、それはおそらく紅牙のものすごく長く長かった堪忍袋の緒が切れた音だったのかもしれないとも。

そして彼は唐突に椅子を蹴飛ばすどころか蹴り破らんばかりの勢いで立ち上がり、真剣持って来たと自慢していたクラスメイトを手刀の一撃で沈めた後、彼が持ってきていた真剣を奪い取った。ちなみに、10秒にも満たない間での出来事だった。

「もう、我慢の限界です」

そう言つて、無表情のまま真剣を慣れた手つきでスラリと抜き、その切っ先をクラスメイトに向けた。言っておくが、彼は剣道もしくは武術を習った事はなく、強いて言うなら体育の授業くらいしかない。しかし、その動作は何故か洗練されており、とても恐ろしかったと言う。

それまで馬鹿騒ぎを繰り返していたクラスメイト達は、彼のその行動に凍りついた様に動きを止めた。普段の彼もしくは他の誰かがやったのであれば、ただのジョークだと受け取られただろうが、今の紅牙は危険なオーラが溢れていた。

どの位危険かという点、丁度彼の近くを飛んでいた紙飛行機がいつの間にか両断されていたりだとか、その巻き添えのように机どころか床まで柔らかいバターの様に切れていたりとか、ずっと見ていたはずなのに誰ひとりその動きどころか音すらわからなかったというほど。怒気を纏っているのに、全くの無表情でそのくせ目が氷より冷ややかで。

大魔王が降臨なさった！！

その時、クラスメイト一同の心が完全に一致した。急に静かになったクラスを除きに来た普通の生徒や教師たちすら凍りついていたり、誰も銃刀法違反だのと口にできる雰囲気ではなかったと、とある教師が青くなりながら言っていた。さらにいえば、少しでも気付かれたら巻き込まれ、身動きしただけでも斬られるんじゃないかという位に殺気が溢れだしていたとも。

「お前ら、ちよつとそこに正座しろ」

大魔王様の、何かを押し殺したような声はさらなる恐怖を呼び、教室内にいたクラスメイトの他に、廊下から覗き込んでいた生徒や教師たちも思わず正座し、中には土下座して泣きながら許しを乞う者まで現れた。

以来、問題は激減し、問題児達も良い生徒となった。それに、もし問題が起きたとしても彼が表情を消しただけで万事解決。もしくは学校総動員で問題の後始末に乗り出す。某復活漫画の某風紀委員長よりも恐れられたとのことだ。

ちなみに、彼が正座した者達に何をしたかは不明であり、聞こうとしても体験者たちは顔を青くするかヘタすると気絶するなどして

しまうので、大きな謎となっている。

とりあえず正座な（後書き）

あいも変わらず残念クオリティ。まさに駄文。浮かんだからやっ
た公開してるけどスツキリした。

珍しくペース早めだけど気のせい。ここまで読んでくれてありが
とうございました。

また、（前書き）

死ネタ第三弾。 現在書き溜めたやつをちょっと手直ししてるだけでやっぱり駄文。 更新速度がカタツムリからネズミにレベルアップ。でもまた滞ります。

自己満足ですがよろしければどうぞ。

また、

誰にも言っていない僕の秘密。実は、僕は原因不明の不治の死の病にかかっている。それは、最初は若干だるいなどと気が付きにくいものだが、その内喀血や激痛等の症状が出てくる。そして、その激痛が無くなったら死が目前に迫っている証拠だ。

この病は、どうしてもかは謎だが手の甲に紅い花のような模様が浮かんでくることから『紅華病』と呼ばれている。

僕が紅華病になっていっているという事を知っているのは、僕と知り合いの闇医者だけだ。その闇医者の方は僕しか知らない。

：まあ、昔ちよつとヤンチャした時に知り合った奴だけど、結構信頼出来る奴だったから今でも交流を続けてるんだけどね。意外と人がいいから、俺の決意を聞いたとき顔をしかめてた。

「この病にかかった人は本当に少ないし、私もはじめてのことだからほぼ手探り状態だ。だが、おそらくお前のその作戦は実行できない。…だから、大人しく看取られればいいのに」

「お前にはまだ看取ってくれる人間がいるんだ。この贅沢者め」

それにしても、今まで散々色々やってきて裏じゃちよつとは名の知れたこの僕の終わりが、こんなに呆気ないなんて笑えてくる。

今さら死は怖くないけど、少し寂しい。漸く普通の生活にも慣れて、それで笑顔で『また明日！』なんて当たり前のように何気ない約束を出来るようになった。漸く笑顔で約束とかできるようになったんだけどな。

皆との笑顔の約束の破り方を知っていたら、なんて思う事もあるけど、やっぱり知りたくなかったりするんだ。だって、最後の瞬間暖かいモノ抱いていたいし。

僕が死ぬってことを皆に教えていないのは、最後は一人で迎えた
いから。まあ、それは最後だからって色々口走りそうだからなんだ
けど。それだけは阻止したい。恥ずかしいから。

昔の自分からは想像もできない程穏やかな僕は、最後は猫のよう
に姿を消そうと思っている。死んだあと大泣きしそうな奴に何人が
心当たりがあるからだ。

姿が無くなっていた方が、死んだなんて思われにくいでしょ？そ
れに、僕昔猫みたいな暮らししてたし、最後に観るのが泣き顔なん
てやだし。

「さーくーらー？朝よー？」

一人で死のうと思っただけど、あの闇医者が言ったとおりちよつと
無理っばい。何故なら、眼が覚めたら動けなかったからだ。理由は
簡単。今まで僕を蝕んでいた激痛が無くなったせいで、酷く身体が
だるい身体。起き上がる動作をするだけで全身汗びっしょりだ。

母さんが呼んでいるけど、それに返事すらできない。…これだと
持つて一日もないかもしれない。

「桜！？どうしたの！？？」

「あはは、ちよつと…体がだるくて動かな…いだけで、別に…大丈
夫…ですよ」

僕の部屋に入ってきた母さんは、僕の異常に気づいたようだ。で
も、命にかかわるものだと気が付いていないみたいだ。良かった。
まあ、言い訳はすぐに見破られたけど。言うか、きっと酷い顔色
してるんだろ。母さんが泣きそうな顔してる。そんな顔させた
い訳じゃないんだけど。

「ちよつとどころじゃないでしょ！今日は学校休みなさい」

「いえ、遅刻で良いんで行きます。…約束したから」

母さんが心配してくれているのは分かる。でも、それとこれとは
別。今日僕は最後の約束を果たす。

顔は真っ青で脂汗だっただけというのに、表情だけはいつ

もの笑顔。それはきつと不自然だと分かっているけど、僕にとって他人を安心させる方法は笑顔しかないんだ。

どうしても引く様子の無い僕を見て、母さんは渋々と言った感じでした。了承してくれた。その代わり、学校まで車で送っていくと言ってくれた。それは今の僕にとってかなりありがたい申し出だった。

学校に着くと、ふらつきながらも自力で教室までたどり着いた。ドアを開けた途端、先生が僕の顔色を見て「帰れ」と言っただけで、無視して席に着く。今日は一日中教室授業だったから、多分大丈夫。南田や西宮とかが心配してくれたけど、それに答えて行くのもちよつと大変。流石にヤバいかもしれない。これじゃ、こつそり猫の様に消えるなんて無理か。でも、出来るだけいつも通りで居よう。最後だからって特別にしたくない。

何とか5時限目まで耐えたけど、それまでが限界だった。五時限目が終わると同時に、僕は倒れた。そして、気付いたら僕は自分のベッドで寝ていて、その枕元には父さんと母さん、それと学校の友達と先生が居た。

ただ、若干視界が不明瞭なせいで表情がぼやけている。ちよつと残念だけど、大体は気配で分かる。なにせ昔色々やってたから気配には敏感なんだよね。しかも今ほとんど目が見えてないから、その分他が鋭くなっているみたい。

担任の鳥羽先生と父さんと東野先輩と南田が怒っていて、母さんと西宮が泣いていた。

「…どうしてそんな弱っていたのに学校へ来たんだ…」
先生のメツチャ怒りを抑えた声、でもその程度じゃ僕は怯まない。どうせもう駄目だと吹っ切れたからばらしまくって先生泣かせてやる。

「別れを言うためですよ。僕はあの後姿を消すつもりでしたから」
その言葉に、驚きの声が上がったけど、先生はそれを黙らせた。ちよつと怖い。いつも怖いけど、今はいつも以上に怖い。ふと、嘔

火直前の火山つてこんな感じなのかなって思った。

「どうして姿を消そうとしたんだ？それはお前の手の甲にある紅い花みtainな模様と何か関係があるのか？」

きつく包帯を巻いて隠してたのに、なんでばらしたんだという目を向けると、母さんが申し訳なさそうにした。きつと怪我の手当てをしようとして、バレテしまったんだろう。

「はい。むしろ、それが原因ですね。先生は知っていますか？『紅華病』」

「イヤ、知らない。が、それがどうした」

「紅華病は、原因不明の不治の病です。そして、僕はそれにかかっています。持ってあと一日位だと思います。あ、大丈夫ですよ？これは感染りません」

淡々と話す僕。でも、周りの皆はその事実を受け止めきれないみたいだ。いや、受け止めたくないのかもしれない。でも、僕は話し続ける。たとえ不治の死に至る病だとしても、この病は最後まで僕の言葉を奪わないでいてくれるから、心置きなく話すことができる。それだけは感謝した。

「僕は、自分の死に際を見られなくなかったので、姿を消そうとしていました。僕は猫と同じですから。今日無理して学校に行ったのは、僕が初めて笑顔で出来た約束を果たしに行こうと思ったからです」

「初めての約束……？」

「そうですね、東野先輩。きつと何気なく言われるものだから誰も気にしていないかもしれない、本当に些細なこと」

「『また明日』ただ次の日も会おうって言う、至極当たり前前の約束です」

「そんな事の為に無理してまで来るんじゃないよ……お前が倒れた時、どんなに怖かった分かってんのか！！」

少し泣きそうな声で言う南田には一寸罪悪感。でも、そんな事なんかではない。僕にとって一番光をくれた様なコトバだからだ。

「今日は、皆に『また明日』の代わりに『サヨナラ』を言おうと思っていたんです。でも、ここに居る人だけに特別なサヨナラをあげます」

もう、本当に時間が無いから、最後の力を使ってとびきりのサプライズしてあげよう。冷や汗が止まらないし、意識も朦朧としてるけど。伝えて見せる。だからどうか、もう少しだけ。

「父さん、若干頼りないとか思ってたけど、ひよろりとしているのに大きな手でなでってくれるの、実は安心できて好きだった。これからは、お母さんと笑って僕に分まで長生きして」

父さんは、さっきまで怒っていたのがウソのように、静かに涙を流した。もともと口数の少ない人だったけど、その分気配でモノを言うから、父さんの気持ちが痛いほど伝わってきてビリビリする。

「母さん、偶に口うるさいとか言っていたけど、こんな僕にこんな暖かな居場所をくれて本当にありがとう。これからは、父さんと支え合って、僕に分まで笑顔でいて」

母さんは涙を流しながら笑顔で父さんに寄りかかった。たぶん、悲しそうだけどとても優しい笑顔を浮かべてくれてるんだろう。母さんって強いから。それが見えないのが、すごく残念だ。

「鳥羽先生、いつも口うるさいって色々悪口言ってゴメンなさい。でも、先生に褒められるのは意外と好きでした。先生は、生徒に笑顔を与えられる人のままでいて」

「言われるまでもない」

でも、そう言った先生の目には光るものが見えた気がした。ちょっと成功した気分。だってほとんど感情を表現してくれない人だったから。今日がほとんど見えないのが凄く残念だなーって思った。

「先輩、先輩はいつも僕をあきれさせたけど意外と頼りがいがあった、僕にとって頼れる兄のような存在でした。社会に出ても、先輩は自分の信念を曲げないで生きて」

「桜のくせに生意気だぞ。言われなくても俺は俺らしく生きてやるよ」

先輩は泣きながら笑顔で言ってくれた。いつも見せてくれてた、頼もしいお日様みたいな笑顔だったんだろうな。ちよつと鼻声だったけど。ホント、先輩が兄さんだったら良かったのに。

「西宮、キミは僕にとって唯一の女友達で、いろいろと相談出来た。同じ年なのに、僕にとってはお姉さんのような気がしてた。キミはその優しい強さを失わないように生きて」

「……うん…分かった……」

嗚咽交じりに返事をくれた西宮は、それでも取り乱してはいなかった。しっかり者で、けどちょっぴり甘えん坊だって知ってた。母さんと同じで、僕が甘えると嬉しそうにしてたよね。だから思わず甘えすぎた気がする。

「南田、お前はいつも乱暴で、一番良く喧嘩した。でも、お前は僕にとって背中を預けるに値する奴だったよ。お前はその熱い心を忘れずに生きて」

「…当たり前だ!!」

俯いていて良く見えなかったけど、泣いているのは分かった。鼻をすする音が聞こえたし、何よりこいつは意外と涙もろい。不良ぶってるけど、ホントはただ情に厚くて口より先に手が出ちゃうそんな奴。一番気を許した相手だ。こいつと喧嘩してる時が一番楽しかった。たぶん、お前が僕の初恋…なんて言ってやらないけど。

「最後に、僕は皆に会えてよかった。はじめて言えた約束はもう果たせないけど、意外と満ち足りた気分だ。皆、サヨナラ、ありがとう」

最後の方はちょっとかすれちゃったけど、ちゃんと聞こえただろうか。でも、そろそろこの眠気にあらがうのも無理っぽいから眠ってしまおう。

でも、我ながら暖かな終わりだったと思う。最後に思わず素の笑顔になってしまふ位に。ああ、幸せだった。閻魔様に会えたら、僕はとても幸せでしたって胸を張って言える位に。

「…けど、お前がいなきゃ面白くねーんだよ…バカ桜…っ」

「言いたい事だけ言って逝っちゃうなんてずるいよ…桜ちゃん」

桜が静かに息を引き取った。その瞬間、桜に一番近い所にいた二人は泣き崩れた。西宮は呼吸さえままならないかのように号泣し、南田は歯を食いしばって静かに涙を流してた。

それを皮切りに、桜の部屋に嗚咽と涙が溢れた。

「桜アアアアアア…!!」

桜のお母さんが泣き崩れ、桜のお父さんはそんなお母さんを抱きしめたまま泣いていた。自分の涙をぬぐいもせず、自分の服が濡れる事を厭わず、まるで涙腺が決壊したかのように泣いてた。

「…バカ者… サヨナラだ、高崎…」

先生は声を出さずにただただ涙を流していた。そして、先生はその涙をぬぐうことなく立っていた。歯を食いしばって、白くなるま

で握りしめられたその拳が、先生の表に出しきれない程の感情を表してるみたいだった。

そして気付いたら、俺も子供のように声をあげて泣いていた。普段だったら、男だし、いい年になってみっともないって思うけど、今は。今だけは、別れを惜しむ涙を流させてほしい。みっともなくても良いから。

「好き勝手言つて、勝手に逝くなよ桜…。そんな顔されたら怒るに怒れないだろ…?」

息を引き取った桜は、今まで見た事もないほどに穏やかで、幸せそうな笑顔だった。それがなおのこと、俺達の胸を締め付けて涙を流させる。

ホント、最後までズルイやつ。

待つてる。輪廻転生とかいうのがあるのを信じて、お前にまた会える時を。きつと律儀なお前のことだ。また俺たちのそばに、お前の両親の子供として生まれてくるんだろう？

だから、今はさよなら。

またいつか、お前と笑い逢える日がくることを祈ってる。

また、（後書き）

また明日って、考えてみればちよつと話できるかな？の結果がこれです。うまく表現できないのがもどかしい。

とりあえず、ここまで見てくれた人へ。ありがとうございました。

養子の適正試験（前書き）

シリアスっぽいのが連発してたのでここらで笑いを。でも駄文です。よろしければどうぞ。

養子の適正試験

「ナニコレエ！！」

「珍百景だよきつとそうさでなければこんな事ありえない」

「だよねえ！！てか冷静に現実逃避しないでくれえ！！」

今俺と浩樹は爆撃されてます。アニメとかでよく見るバズーカとか銃火器とかで。必死になって避けてるうちに、双子の弟である浩樹は足をくじいた。今は俺の背中の上で現実逃避してて、俺は弟を背負いながら避けてるんだよね。俺達こんな事される覚えはないんだけど。この時ばかりは何故か無駄に高い身体能力に感謝した。

「俺はこんな事される覚えはないんだけどお！！浩樹は知ってる！？」
「イヤない。全くこれっぽちも無いようん」

両親が死んで、それ以来兄弟力を合わせて二人だけで生活してきた。今まで裏の方に足を突っ込んだ覚えは無いし、お金だって中学に許可をとって真っ当なアルバイトで稼いだものだけだ。

いたずらや悪ふざけも、やった後はちゃんとけじめをつけた。うん。俺らの何処にも原因は無いよ。ただ、流石に同体格の浩樹背負ったまま避け続けるなんて芸当、特に鍛えてもいない僕が続けられるはずも無く。

「あ、ヤバい…！足ちよつと限界っぽいかも…」

「冒樹いー！！？」

せめて弟だけでも逃がそうと思い、全力で交番があると思われる

方向に空高く放り投げた。ただ逃がそうとすれば反抗するのが長年の付き合いで分かっているから、助けを呼ぶように叫ぶ。

浩樹は身のこなしが軽いから、無事に屋根の上に着地し、そのまま猫のように走り去っていった。

黒服のバズーカを持った男たちは、浩樹の事を追わずに僕だけを狙っている。ラッキーではあるけど、謎だ。もしかして、これは俺個人に対する何かか？どっちにしろが危ないって事に変わりはないか。

しばらく避け続けていると、いきなり爆撃が終わった。すでにボロボロな僕だけど、何とか致命傷になる事は避けた。今の俺は生まれたての小鹿状態だ。軽いでこピン一つで倒れるかもしれない。いきなり黒服の男たちが整列したと思ったら、その後ろの方から白いスーツを着た人が現れて、僕に向かって拍手をしながらにこやかに言った。

「桜宮昌樹君、おめでとう」

「すみません何かおめでとうなんですかいきなり人を爆撃したくせにもしかして僕もう死んでいるとか言うオチですか」

思わずノンブレスで言いきった僕に、その白い人は驚いた顔をした後に申し訳なさそうな表情をした。

「ごめんね？だって適性検査しなきゃ受け入れてくれないって部下たちが暴動起こすんだもん。後ちゃんとキミは生きてるから。ここ現実だから」

「適性検査！？なんの！？」

「僕の養子になるための適性検査」

「よ、養子い！？」

なんで養子になるために適性検査が必要なのってか爆撃される事が何故に養子の適性検査に必要なのかと僕の頭は大パニックだ。あれか？頑丈さとか機転とか？

「突然の事で驚いてるかもしれないけど、僕と君って一応血つながってるんだよね」

どうやら彼は母さんの弟さんで草風蒼志郎と言っらしい。そして、とある有名グループの社長さんで、結婚はしたくないけど子供は欲しいので、養子として僕と浩樹どちらも引き取る事にしたらしい。でも、その会社には裏の顔があつて、そっちを任せられるのはどっちか試す…それが今回の適性試験だそうだ。

「これからは義父さんと呼んでね」

語尾に星でも付けたんじゃないかと疑いたくなるような、やけにはしゃいでるのは明らかに年齢より若い外見の叔父さんで、恐らくボス的な位置にいる人を目の前に、俺は思わず現実逃避したくなった。

拝啓、あの世に行ってしまった両親へ。俺はどうやらヤのつく自由業の次代にされてしまうようです。弟は普通の社会人になれますが。

こうして、新しい環境での生活が始まった。…いろんな意味でもややけどね。

養子の適正試験（後書き）

続きについては反応次第で書きたいと思います。ストックにはこれの続き書いてないけど。

最後まで読んでいただきありがとうございました。

まおうは、こいにおちた！（前書き）

勇者らしくない女勇者に魔王がほれたら面白いだろうなと思って書いてみた。

駄文だけど書いてて結構楽しかったです。よろしかったらどうぞ。

まおうは、こいにおちた！

side：勇者

代々続く勇者と魔王の戦いに、最近変化が現れ出した。大抵事の発端は大国の姫様が魔王にさらわれる事なのだが、いい加減誘拐対策をしても良いと勇者クラウンは思っている。

大体おかしいんだよ。前の姫様が魔王に連れ去られたんだったら、もう少し警戒しても良いと思うんだけど、警備レベルは昔から全く変わらないらしい。正直それ聞いた時はあまりのバカさ加減に呆れてものが言えなかったよ。

それと王様の勇者の選び方にも驚きだったよ。家系じゃなかったんだね勇者って。てか各地の闘技場で一番強くて見た目が良い奴を選んで、そんで試験みたいなのを受けさせて学力を図って、最後は王様の直感で選ばれる。バカだと思う。

しかも、拒否権は全くないから私にとってかなり迷惑だ。ただ闘技場で荒稼ぎしてたらあつという間に勇者様だよ。乾いた笑いしか出てこない。

仲間は誰でも良いけど6人までって決まってるし、勇者に選ばれたら適当に金を渡して、その後は一切関わろうとしないし、その癖無事に魔王を倒して姫を連れ帰ったら姫様の婚約者にしてやると言われた。嬉しくねーよそんなもん。それでも私女だし、ソッチの趣味ないし。見た目で選ぶなってーの。

でも断れないから、仕方ないからここ　魔王城までやってきてしまった。仲間は皆気心の知れた傭兵仲間三人だけ。金は払ってるけど。

「どうする？ここで帰ってもらっても良いよ？って言うか、魔王戦になつてから逃げられるとなんかヤだし？こんなところで死ぬのは僕一人で十分だし。でもまあ、死んでやる気は全くないけどね」

そう言うと、案の定三人とも帰っていった。薄情なのではない。これは勝ち目のない闘いには手を出そうとしない傭兵の生き方だからだ。むしろ私の方が異常なんだ。

「俺達は逃げるが、お前はやはり行くのか？ここで死んだ事にして逃げる事も可能だろ」

僕達の中で一番年上の傭兵の先輩が心配して言うてくれたけど今の私には無理だ。

「無駄ですよ先輩。私は選ばれた時からこの空想みたいで呪いのような使命から逃れる術は無いんです。それに、私が傭兵になった経緯：先輩は知ってるでしょ？」

「ああ、お前はただ強い奴と戦いたいんだよな。…だったら止めても無駄だな。精々頑張れや」

「言われるまでも無い」

他の二人は不思議そうな顔をして僕達のやり取りを見ていたけど、私と先輩は挨拶をした後、私は一人で魔王城へと足を踏み出した。

この先私を待っているのは、生きて理不尽な目に会うか死ぬかの二択しかない。まあ、死ぬ気はさらさらないし姫の婚約者なんてまっぴらごめんだ。

SAID 魔王

「私を早く解放しなさい！！」

鳥籠のような檻の中で叫ぶ姫に、正直溜息が絶えない。確かに姫は美人の部類に入るだろうが、高飛車な口調と高慢な性格のせいでマイナスだ。むしろ伝統とかじゃなかったら絶対手え出したくないタイプだ。

それにしても、勇者も哀れだ。こんな高飛車女助ける為に命がけな事しなきゃいけないし、負けたら死、勝ったら高飛車女の婚約者にされちまうんだもんない。俺の方は死んだふりとかでごまかせるけど、勇者は誤魔化せないもん。まあ、同情したところで何もするつもりないけど。

扉が静かに開けられ、そこから勇者が現れた。…てか、勇者で合ってるよね、このタイミングで来るのは勇者しか居ないし。

俺が疑ってしまったのも仕方ないと思う。だって、普通勇者と言ったら白とかを基調にした明るい色合いの服を着て、ついでにピカピカの鎧とか身につけて、そんで聖剣とかもってるイメージあるじゃん。

けど、目の前の奴は違った。服装は黒づくめだし、鎧は使い古した感じだし、青い輝きを放つ剣（あれって魔剣だよな）を持っていた。正直、一瞬間が人の形をとって現れたのかと思った。どっちかって言うと勇者じゃなくて魔王とかって方があってる気がする。てか勇者らしさが欠片も無い。とりあえず、気を取り直してセリフを

口にした。

「よく来たな勇者よお!？」

そして、俺の口上を遮っていきなり鞘を投げつけてきた。なんちゅうやつちゃ。人の話はちゃんと最後まで聞きましようって母ちゃんに教えられなかったのか、コラ。

「いきなり何すんだよ!普通口上述べてからバトルだろ!？」

「そんなめんどくさい事知るか。私はアンタと戦いたいだけなんだから」

そう言った勇者はようやく俺に顔を見せた。そして、その顔を見た瞬間、俺の頭の中で鐘が鳴った。…メツチャストライク。

身体は猫のように引き締まって、それでいて出る所はそれなりに出てる。いままでうつむきがちで分からなかったけど、色白の整った顔立ちよりが、強い意志を感じさせる輝きを秘めた黒曜石のような瞳が、俺を捕らえる。正直、ゾクリとする。

何か側近たちが「あれヤバイですよ!」「勇者違うじゃん!!あれただの狂戦士にしか見えないんですけど!!」とか騒いでたけど、無視した。

「なあ、お前は何で闘うんだ?姫を取り戻すためか?それとも世界を救うためか？」

俺が思わず口に出した問いに、勇者はキョトンとした後呆れたようにいった。

「囚われの姫を救うとか、世界を救うとかそんな事どうだっていいんだ。私はただ、強い奴と戦いたいだけさ」

それに、私に拒否権は無いしねと言った勇者を、俺は思わず抱きしめて叫んでいた。どうやったかって？そんなの愛の力で決ってるだろ！！

「勇者！！お前に惚れた！！結婚してくれ！！」

「はああ！？」

「お前の顔も雰囲気もサイズも何もかもドストライクってか俺お前に運命感じたってか一目惚れした！！」

「何を言ってるの！？さっきまでのシリアス何処に落としてきたのさ！？」

「と言うより貴方ホントに魔王かどうか怪しくなっていますわよ！？」

「いいのそんなの恋に関係ないから！あ、姫は責任もって城に送り返すから安心して勇者はここにいて！！むしろ俺と一緒にここに永住してよ勇者！！てか勇者の名前教えてくれ俺はカルマってんだ！」

手下の魔物に姫を無事に城まで送るように指示を出し、あの手この手で抜け出そうとしている勇者を抑える。抱きしめてみると良く

分かるんだけど、こいつ女なのに適度に筋肉ついてるし見た目よりかなり強い。多分、俺じゃなかったら今頃腕千切れてるかも…。

「離せ！私を離せ！でないと私が闘えないじゃないか！！」

「ヤダよー。だってお前抱き心地良いし、離したらお前絶対攻撃してくるだろー」

「当たり前だ。私は闘いたいからここに来たんだ」

闘う事こそ己の存在意義とでも言わんばかりに闘志をむき出しにしてる。凄い痛い。これぞ命がけの恋って奴か？…洒落にならねえ。けど、この恋にだったらこの命、賭けたって後悔はしない。

「俺はお前と恋したいってか結婚したいんだ！…でも、名前教えてくれたら闘ってやるよ」

「私はクラウンだ」

即答したから、仕方なく離してやる。すると、クラウンは足を一閃させてきた。顔が赤いから、多分照れ隠しだ。可愛い。例えそれが、普通だったら首がちぎれ飛んでる威力だとしても気にしない。断固照れ隠しだと言い張る。思わず顔がニヤける。

この魔王、MじゃなくてSです。一応。

「私をからかって何が楽しいー！！」

「イヤ？けどメツチャカワイイ」

「なっ！！」

俺の言葉にさらに顔を赤くする。どうやらストレートな愛情表現に慣れていないのか、先程までの刺すような殺気は無く、戸惑って怯えてる猫の様な感じた。まさに子猫ちゃん。

今まで女の子を何人も惚れさせた事はあるけど、それは遊びだった。つまり、これが初恋になる。

「勝負は簡単。クラウンが俺に惚れるか、俺が死ぬかだ」

覚悟しろよ？俺の可愛い勇者様。必ずお前を俺に惚れさせてみせる。

その瞬間、勇者は今まで感じた事のない悪寒とともに何か危険を感じたそうです。

まおうは、こいにおちた！（後書き）

ほんと駄文。でも自己満足だから気にしないことにした。
ここまで読んでくれてありがとうございました！！

モブ視点　くある主従のバトル（前書き）

こういう、モブ視点って好きなんです。

モブ視点　とある主従のバトル

俺達の平凡な高校生活は、ある日突然爆音と共に粉々に粉碎された。俺達はいつも通りに古文の授業を受けていた。確かに、睡魔が大群で押し寄せてくることに辟易していたのは事実だけど、だからってこれは無いぜ神様。

五時限目の古文だったため、居眠りしている奴も多かったけど（俺も含め）、そのある意味平和な時間は突然やってきたテロリストたちによって崩された。そいつらは、黒のライダースーツを着込み、黒のフルフェイスのヘルメットやボディアーマーなどで統一しているのだが、七人全員が屈強そうな体つきをしているのが分かった。

寝ばけてボケかまそうとしてる連中は、周りが必死になって止めた。むしろ夢だったらどんなに良かったか……。寝起きにこんな見たらまだ夢の中だって普通は思っような。うん。

しかも！そいつらは銃とかで武装しているもんだから、どんなに頑張っても一学生である俺達に勝ち目はない。

「我々は闇の使者とでも名乗っておく。我々の目的は不当な扱いを受ける同胞たちの解放と汚職で嘆く人々を救う事だ。反抗しようとしなければ危害を加えるつもりはない」

リーダー格らしき人物がそう言ったから、俺達は女子を内側にして教室の隅に固まる事にした。いくら危害を加えないとは言え、逆上してうっかりとかやられたら嫌だからだ。それに、今どき珍しく

『女は護るべし』って武士みたいな考えを持つてる奴が多いし。

しかし、そんな緊張した空気をすり鉢でゴリゴリやってくれちゃつてる勇者が居た。

「何言つてんだクソガキども。バカなことばっか言つて俺の眠りを妨げるなんぞ万死に値するぞ」

「え、それって俺達の事？俺達今の所ろくに発言した覚えはないんですけど」

「違えよ。そこの真つ黒黒助どもだ」

誰か叫ばなかった俺達を誉めてほしい。だって、さつきから乱暴な口を聞いているのはクラスでも目立たない方の男子だったはず。それが武装した強そうな男七人相手にクソガキ発言。心臓に悪い上に今までのシリアスっぽい雰囲気霧散している。

俺達がそいつ、隠明寺八房の言動に内心大絶叫しているのも知つてか知らずか、本人はポンポンと爆弾発言を全力投球している。

「大体大の大人が七人そろって闇の使者とか名乗ってる時点でもかなりイタイんだけど。もしかして精神年齢中二の夏で止まつてるんじゃない？」

やーめーてー！そろそろテロリストの方々プルプルしながら武器握りしめてるから！そろそろキレそうなフラグバリ3で立ちまくりだから！！

そんな俺達の心の叫びを代弁するかのように、一人の女子が隠明

寺の所にかけて行つた。普通ここは引き留めるべきだつたんだらうけど、皆呆けてたから反応が送れた。

「すみませんコイツ寝ぼけてるんです！！今起こして謝らせますから待って下さい！！」

そう言つてテロリストの前に立つたのは、隠明寺の幼馴染で主だ
という土御門明美だ。どうやら本当に寝ぼけていたらしく、彼女が
目の前に立つても無反応。つか船漕いでる隠明寺。そして土御門
はそう言ふなり隠明寺の胸倉を掴んで平手打ちを喰らわせている。

[illegible]

最初は普通の平手打ちだったはずなのに、今じゃ音が連なってる。往復ビンタの最速記録でギネスに乗るんじゃないかってくらい velocity でのビンタは、見てるこっちの方が痛くなつて来る位だ。むしろクラスの数人が自分のほっぺに手え当てて痛そうに見てる。流石に闇の使者のみなさんも制止をかけた位だ。

「ちよつ、お嬢さん落ち着いて！我々に対するその坊主の言葉は確かに頭に來たが、お嬢さんの速度で平手食らわせていたら逆にこっちが痛いから！もう良いからやめたげて！！」

そして土御門による痛い目ざましコールは終わりを告げた。どうやら男の言葉によってやめたのでは無く、ただ単に隠明寺が目覚めましたからだ。

「八房、眼は覚めた？」

「おう、三日は起きてられる位ばっちりだ」

…普通、音が連なるほどの速度でたたかれたらヘタしたら首が折れるんじゃないかと思うんだけど、やられた本人は頬を少し紅くしているだけで全く効いてないようだった。

「じゃあ、なんであんな暴言言ったか説明してくれる？」

確かに、それは俺達も聞きたい。どうやらそれは闇の使者の人達も同じだったらしく、先を促してた。しかし、俺達は失念していた。奴が齒に衣着せぬ性格である事を。

「ああ、クソガキ呼ばわりの事？そのまんまだよ。良い大人が自分の要求が通らなかつたからって自分

より弱い、本来ならば護るべき存在を盾にこり押ししようとしてる。しかも、どう見ても護る対象に向けるべきものではないものを振りかざして。そんなのただ泣きわめくガキと何もかわりやしない。むしろまだ普通のガキの方が楽さね」

「…貴様是我々の崇高なる使命をバカにすると云うのか？」

「バカにしてんのはアンタらの人間性。いい加減目を覚ませクソガキどもが」

「まあ、確かにアンタの言う事には一理あるわ。あたしも年をとっただけの人間を無条件に敬えるほどできてないしー」

「俺も。年を食っただけの奴を大人とは認めない。マジガキなら更生の余地はあるけど、こんだけ年を重ねちゃ難しい物が有るさね」

…正直、ちょっとすつきりした。けど、そうも言ってもらえない。言われ放題の闇の使者の方々は今や錆びた鎖に繋がれた猛犬と同じ気配を漂わせているからだ。

「さて、オイタが過ぎたガキにやそろそろお仕置きの時間だ」

瞬間、隠明寺が纏う空気が変わる。電信して、教室中の空気は隠明寺と同化し、辺り一帯に一陣の風が吹いたような気がした。

隠明寺は、そう言うなり霞むような勢いで近くに居た闇の使者の一人を殴り飛ばした。三メートルくらい吹っ飛ばのを俺達は茫然と見ていた。

アレ？人間ってあんな簡単に吹っ飛ばもんだっけ？てかお前そんな強かったのかよ。

「確かにテメエらの崇高なる使命とやらには少し賛同しない事もない。だがな、こんな卑怯な手使ってまでやり遂げるにはちと軽いんじゃないかい？それに、俺はこいつらの事が気に入ってるんでね。傷つけられたくはないのさ」

正直かなりカッコイイと思った。ただ力が強いんじゃない。彼は心も、魂も強いのだ。俺達を背に、何も恐れるものは無いと言っているようなそのしゃんと伸びた立ち姿は、見る者を引き付けて離さない不可視のヒカリを放っているようだった。

ただ、隠明寺のカッコよさと、現在の非日常に当てられて腐女子

（腐男子もか）が換気するようなセリフを口走ったやつが数人いたので、ひっぱたいて呼び戻したのは蛇足か。

「良く言った！それでこそあたしの下僕よ！」

いつの間にか隠明寺のすぐ後ろに立っていた土御門は、何処から出したかわからない巨大な鉄ハリセンを手に不遜に言い放った。

彼女も、まるで戦場にその名を轟かす常勝不敗の女將軍のように堂々と立っていた。むしろ背後に『傲岸不遜』の文字がドーンと見えた気がした。

「誰が下僕だ……。まあいいや。とりあえず殺っちゃうとするか」

そのやる気のなさそうな言葉を皮切りに、暴風のような勢いで隠明寺は圧倒的な力の差を見せつけていた。

暴風のように荒々しいその動きはどこか洗練されているようにも見え、そして、時折飛んでくるのを土御門が鉄ハリセンで容赦なく吹っ飛ばす。二人の息はぴったりだ。

闇の使者は他にもいたらしく、最終的には三十人位襲いかかってきたが二人はかなりあさりと倒してしまった。喧嘩慣れしてるところの勢いではない。もはや次元が違うと思わせる位だ。二人には、手加減と言う言葉はあっても容赦と言う言葉は無いのではないかと思わせるほどだった。きつと鬼神の如き闘いぶりとはこのことを指すんだらうと思った。

辿り着いた警察が見たのは、丁度窓を割って外の池に落ちて行く闇の使者の姿だったらしい。もっとも、その頃には俺達も隠明寺と

一緒になつて暴れていたけどな。

モブ視点　くある主従のバトル（後書き）

非日常による通常の崩壊って結構好きだったけど、書くのは難しかった。

ここまで読んでくれてありがとうございました。

もうちょっと慌ててください。(前書き)

性転換ネタがやりたかった。後悔はしていない。相変わらず駄文
しかも短い。それでもよろしければどうぞ。

もうちよつと慌ててください。

朝いつものように学校に行くと、いつも俺より先に来ている女子が居る。いつもそいつは一番乗りで読書をしている。それで俺は二番乗りだ。そう、いつもなら。

今日は違った。読書をしているのも長い髪を縛っているのもいつも通りだ。しかし、制服がスカートではなくスラックス…と言うより、男子の制服を着ていた。体格だって男のそれだったし。

「…いつまでじろじろ見ている気だ？」

「おまえ、男装趣味が「ある訳ねーだろボケ」…うそ」

そう言われて思わず固まってしまった俺は普通だと思う。彼女は確かに昨日まで女子だったはずだ。若干セクハラになるかもしれないが、昨日までは確かに控えめにだけど胸もあったし。でも今は明らかにただの胸板だ。固まってしまった俺が気になったのか、彼女…は席を立て俺の前に立って手を振っていた。

昨日までは若干俺の方が高かったのに、今じゃ少し負けている。…結構悔しい。ほんとはそれどころじゃないんだけど、混乱中ということで大目に見て欲しい。

「大丈夫か」。もしかしてショックで彼岸までぶっ飛んじまったか？」

「いやいやいや、おかしいよね。明らかにおかしいよね!!」

「それは俺も切実なまでに感じている感情だ。物語で読むと笑えるけど実際起きてみると笑えないもんなのな」

「いや、そこを笑い飛ばそうとしている君はかなり遅しいよ…」

彼女の話によると、確かに昨日寝るまでは女の体だったそうだが、しかし、今朝起きてトイレにいくと、ついていないはずの物がぶら下がっている事に気が付き驚いたらしい。(せめてもう少し恥じらってほしかった…)そして、閉じこもる訳にもいかないので弁当を作り、朝ごはんの用意もして、制服に着替えようとしたら女子の制服以外にちゃんと男子の制服も用意されていてらしい。本人は、サイズがちょうど自分好みのサイズだった事に驚いたらしい。(俺としてはもう少し別の事に驚くべきだと思う)そして、起き出してきた家族が彼女の異変に気付き大絶叫。でもすぐに慣れた家族はそのまま彼女を学校に送り出したとのことだ。

「…ねえ、君のその無駄に高い順応性は遺伝かい？」

「まあ、それもあるだろうけど。俺は中でもぶっちぎりだぜ？」

…男になった彼女は、とても男前だった。そう言えば、彼女は以前から男顔負けの男勝りだった。し

かし、それが男子の体になってしまつてここまでカッコ良く感じるのかと驚いた。

「ま、なんでこうなつたかなんてわかんねえし、かといって戻るまで登校拒否なんてやってらんねえ。

性別が変わっただけで、それ以外はいたって健康なんだし」

「それで済ましていい問題じゃないと思うのは気のせいかな」

「多分それが普通だから気にすんな」

「お前ももう少し気にしろよお!!」

それからは大混乱だった。いつも女子が座っているはずの席に結構良いガタイした男子が座ってるから、クラス間違えたんじゃないのか? いいや私はここのクラスで間違いないですみたいなやりとりで大混乱。

彼女の友達である土御門も驚いてたし、クラス中が大パニックだ。けど、一足先に情報を知っていた俺は冷静でいられたし、当の本人はのんきに欠伸している。しかし、流石に気まづかつたらしく、言い訳の様なものを口にした。

「あー、確かに混乱するかもしれませんが、私自身は何も変わっていません。強いて言うなら、男になった事により色々動きが大胆になるかもしれないですけど」

見事な敬語で話す彼女。香月は、本当に変わっていないという事が伝わってきた。けど、言い訳になってないよ、それ。むしろ混乱を招いただけだよ。むしろ大胆になるってなににする気なお前。けれど、そんなツツコミは騒ぎの原因に笑い飛ばされた。

それから香月は大人気だった。前からフェミニスト的なところはあったのだが、男になった事でなんかリミッターがブチギレたらし

く今じゃかなりの紳士だ。そして、男子にはいくらか砕けた口調で、心を許している人間には乱暴だが気の良い感じで接している。

例えば、女の子の荷物はさりげなく持つし、力仕事は率先してやる。誰かが困ってたら当たり前のように助けるし、足をくじいたり、怪我をして動けない奴とか、お姫様抱っこで保健室に運んでたから、ちなみにこれは男女問わず。男でお姫様抱っこされたやつはホントご愁傷さまってやつだ。

髪は長いままだし、顔だってほとんど変わってない。しかし、男のになった香月はかなり人気者だった。香月自身も性別は気にしていないようだ。流石に、着替えるときは女子とは別で着替える。まあ、男子と一緒に着替えようとしたときは必死になって止めただ。

「紳士で力持ちで気配りも上手で、今じゃラブレターだって貰ってるんでしょ？」

「うん。下駄箱の中にどっさり。開けた瞬間雪崩を起こすなんて初めての体験だったよ」

「モテモテだな香月よ」

「男子からも女子からも来ればそんな事言えなくなるよ」

そう言う香月は若干煤けて見えた。それもそうだろう。女子からも男子からも彼氏になって下さいやら大胆にも抱いて下さいと書かれたものもあったり、中にはヤンデレ系の手紙も来てるらしい。そんなんだったら俺でも悲鳴を上げるだろう。

「てか、ヤンデレ系は血文字とか当たり前だからな」

「ごめんリア充爆発しろと思ったけど全然羨ましくなかった」

暗くなりかけた雰囲気を払しょくするように、話題を変えてみた。

「ところで、なぜ性転換したか原因はつかめたか？」

「いや？今ん所はさっぱりだ。…そう言えば、夢の中で言い争ってる自称神様とやらを殴り飛ばしたよ
うな気がするぞ？」

「…原因、それじゃね？」

「…え、マジ？」

どうやら、彼が彼女に戻るのはまだまだ先のようだ。

もうちょっと慌ててください。（後書き）

珍しく連投。なんとなく慣れてきた今日このごろ。
最後まで読んでくれてありがとうございます。

ファンタジー・プレイヤー（前書き）

男前な人魚ってどうだろう。そして気づいたら出来上がった。
駄文&短いですがよろしければどうぞ。

ファンタジー・ブレイカー

それまで僕が持っていた人魚像は、その日を境に木っ端みじんにされた。正確に言うと、人魚に対するイメージだけだ。

その日僕は、何故か学校の人達に引きずられるまま海に来ていた。何でも、そこはアウル君（ハーフのイケメンなお金持ちの坊っちゃん。実にハイスペック）の家のプライベートビーチらしく、人影は僕達のしかないし、何よりもとても綺麗だった。

だけど、僕は彼らのいじられ要員であつたため、素直に喜べなかった。きつと何かあると。そして、予想通り着衣のまま海へ投げ込まれた。制服じゃなかったのが幸いだったけど、両手両足を掴まれて、振り子みたく投げられたもんだから結構飛んだ。そして、派手な水しぶきと全身に感じた痛みを境に、僕の意識はブラックアウトした。

気がついたら、岩礁の上に仰向けに寝かされていた。そして、僕の頭の近くには美少女と言っても過言ではないくらいきれいな子が居た。しかも、彼女の、本来足であるはずの部分は、魚の尾びれの形をしていた。

「…人魚姫…？」

「んな寝ぼけた事言えるんだつたら大丈夫そうだな」

…あれ？僕さっきの衝撃で耳でもやられちゃったかな？そうちょっと悩んでると、再び彼女が凜とした綺麗な声で話しかけてきた。

「オイ少年、人が話しかけてるつてのに無視するたあい度胸だな。しかも助けてやった礼も何もなしにコラ」

……腰のあたりまである艶やかな黒髪、強い光を秘めたアメジストの瞳、すつと通った小ぶりの鼻に小ぶりのピンクの唇。贅肉なんて欠片もないし、胸は貝殻のアレで隠されてるけど結構大きめだ。そんな、理想の女の子そのものみたいな可愛い人魚姫が、とても男らしく見える。言葉づかいも含め。

「……いえちよつと現実って厳しいんだなって再確認してただけです。助けてくれてありがとう」

「?そうか。たまには現実から目をそらしたくなったりするよな」

若干遠い目になりかけながらもきちんとお礼を言うと、何故か同情された。何故だ。

「あ、僕は東雲涼といいます」

「ああ、俺はセレーナだ」

……無駄に高い順応性がこの時は少し恨めしい。とても男らしい口調で話す人魚姫と、普通に自己紹介から世間話までする仲になってしまった。話している内に、彼女とは結構いい友達になれそうな気がした。

「それにしても、人魚って物語の中だけの存在じゃなかったんですね。事实は小説よりも奇なり、です」

「ああ、でもあの話はほとんど実話だぞ。俺達人魚は恋愛が大好きだから、その為なら命をかけるのも不思議じゃない位だし。まあ、皆がそうとは限らないけどな」

「セレーナは何となく恋愛よりも身体を動かす事の方が好きそうだよね」

「さっすが涼！その通りだぜ。でもなんでわかったんだ？」

「…誰でも君の言動その他諸々を見ていればすぐわかると思うよ」

それから日没までそこに居て、あまり遅くなるとお互い周りの人間がうるさいという事で帰る事にした。いつか再び会う約束をして。

「お前潮に流されて結構遠くまで来てたんだよ。まあ、気絶してたから水も飲んでなかったし、俺がすぐに助けてやったから大丈夫なんだけどな」

「結構危ないは足わたってたんだ、僕…。でも、結構遠いなら、僕帰れないかも」

「近くまで送ってやるよ。まあ、さすがにその他大勢に姿を見せるわけにはいかないから、ある程度したら自力で帰ってもらうけど」

「大丈夫。色々と無茶に巻き込まれたせいで地味に逞しくなってるから」

「お前普段何されてんだよ」

世の中には知らないほうがたくさんあるんだよ？つて
につこり笑ったら、顔青くさせてものすごく頷いてた。やだなあ、
僕脅してないよ？

セレーナにビーチの近くまで連れてってもらって、そこで別れた。
ちなみに、道すがら聞いた事実として、姿を見せちゃいけないのは
禁忌とかじゃなくただ単にめんどくさいからということ。夢って儂
い。ある程度泳ぐと岸にたどり着いたのでホッとしてたら、僕を海
に放り込んだ連中が顔中汁まみれにして出迎えてくれた。さすがに
やりすぎたと思っただけらしい。

「でもこれ、僕の運が良かったただけだから。普通なら死んでたよ？」

そう言っただけ笑ったら、しばらくの間皆大人しくなった。ついでに
冷や汗ダラダラ。おかしいな。僕はおどしたつもりないんだけど。
まあ、それ以来やりすぎないよう気を付けてくれるようになったか
ら良いんだけど。

だけど、暇を見つけてはセレーナ似合いに行っただけ、何故か会
えずじまいだった。もしかして、あれは頭を打ち付けた時に見た幻
覚か何かだったのかと思うくらいには、時間が過ぎていった。

だけど、それからしばらくして、今度は陸で彼女にあった。その
時はちゃんと人間の足が生えていたし、男物だけど最近の服に身を
包んでいたけど、間違える事は無かった。

「セレーナ？どうしてここに？」

「あ！涼！！探したんだぞ。テメエ俺が待つてたつてのに全然来ねえから、俺がお前を探しにここまで来てやったってわけさ！」

「とりあえず大声はやめて。そして僕だって毎日じゃないけど君を探しに行っただけど？」

「ありゃ？行き違いだったか？」

「多分そう。あ、この前の御礼、何が良い？」

「とりあえずお前の所に住まわせろ」

「良いよ…ってえ？うそなんで？」

「ちょっといたずらが過ぎて海から追い出されて行く場所がねえ」

久々にあった彼女は、とても綺麗な笑顔を浮かべているにもかかわらず、とても男らしくずうずうしかった。幸い、僕は一人暮らしだから何とかなったけど。

こうして、僕と人魚の不思議な同居生活は始まった。そして、ある意味日々夢を破壊されていて、眼から鱗の勢いだ。

「オイ涼〜。座敷わらしつれてきたぞー」

「はじめましてなのですう！とりあえず俺様に跪けですう！」

「ああ、また夢が…」

「でも楽しいだろ」

「否定できない…」

それでも、彼女が引き連れてくる個性豊かすぎる面々に、苦笑しつつも普通にお茶をすすめてる僕もそうとう変わってるんだろっなーと思いつつ、楽しいから流されたいと願う今日この頃。

ファンタジー・ブレイカー（後書き）

これの続編はありませんが、要請・妖怪その他もろもろのイメージを壊してみたいと言うリクエストがあったら、頑張つて書いてみようとは思っています。

さあ以後まで読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3331s/>

なんかカオスな短編集

2011年11月12日00時41分発行